

(日本語訳)

発見

ベルリン国際映画祭フォーラム部門で、若手映画監督・太田達成の作品が初めて海外で上映された。

空虚の豊かさ

東京藝術大学の卒業制作として16mmフィルムで撮影された『ブンデスリーガ』(2016年)で、太田達成(1989年福島県生まれ)はすでに特異なミニマルな作風を実践していた。使われなくなったビルで、数人の謎めいた若者が出会い、卓球をしたりかくれんぼをしたりするが、そのうちの1人が穴を掘り始める。東京でのプレミア後、ベルリンで上映された『石がある』(原題: There Is a Stone)は、ドラマにあまり重点を置かず、登場人物よりも動く身体によって構成される映画という、この流れを引き継いでいる。

見知らぬ町に到着した若い女性が、そこで何が見られるのかと男に尋ねるが、返ってくるのは用心深い表情だけである。太田達成は、この空虚なはずの場所と、それに続く彼のキャラクターの無為さを探求することで、それでも楽しめる何かを見出した。完全に都会でもなく、完全に自然でもない、若い女性が近づく風景は、事実上、閑散としている。

観察者の存在に驚いた男は、彼女に「大丈夫ですか」と尋ね、彼女の答えが聞こえないと、腰まで川に浸かってでも歩いて川を渡ろうとする。この、ある種のバーレスクなセンスで描かれた、絶え間ないコミュニケーション不能とごちなさを背景にして、2つの孤独の出会いが起こる。跳ね返りのレッスンの後、小石を積み上げたり、木片のバランスを取ったり、砂の斜面を滑り降りたりして楽しむ。

太田達成は決して筋書きを作ろうとせず、むしろ純粋な現在という条件を、登場人物と役者たちのために作り出そうとしている。それどころか、状況や場所に蔓延する異様さにもかかわらず、この2人を同じ人間として認識し、彼らを突き動かしているものを直感的に理解するという単純な事実と結びついて、強烈で動物的な感情を呼び起こす。

手持ちカメラは、シルエットがフレームに入り込んだり、フレームを占領したり、フレームから離れたりですることで、そのダイナミクスが強調される。人間関係の不安定なバランス、本能的な社交性と恐怖の衝動の間で揺れる振り子を描くのだ。太田達成は最後まで帝王であり、その最初の単純さを裏切ることなく、位相のずれたショット・リバーショットのねじれた美しさの中で、物語を終結させることに成功している。